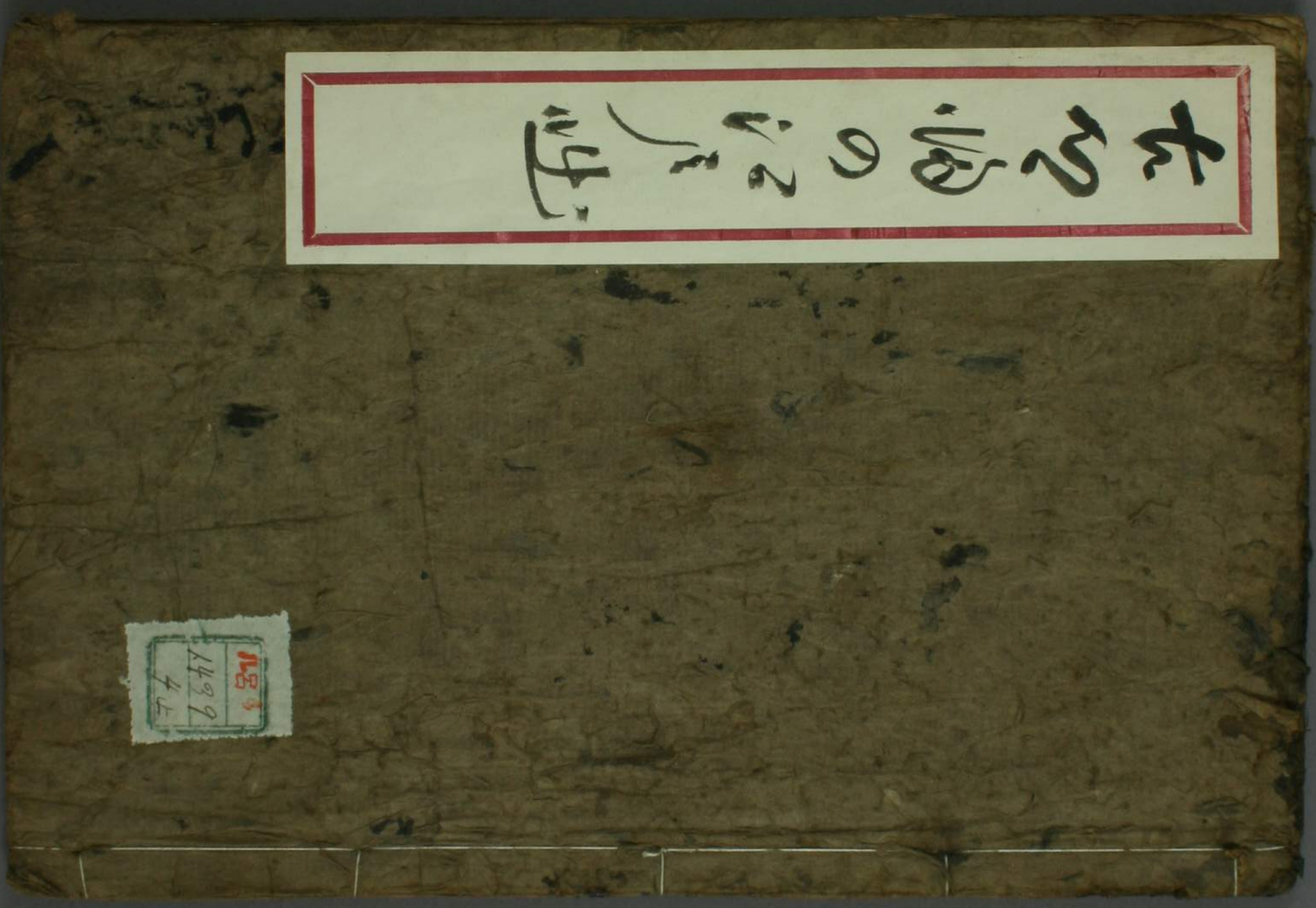

本草海のこゝろ

1489
4

小倉氏

第四

迴向院并酉年之火事

そもそもとあくぶうりうんへきんとそいづくに町くの
行くに光やいあめ物ふるまくら。もさ計町行もまくし
光をあめくるこそ。ハ武蔵とも思へりけるかとも
光を流るそ行ふ諸宗ふ寺迴向院ふ行くら
さまでびさ寺ハ。ものさびの第創りて。拙の名をとめも
そのこ明暦三　酉年四月十八日の辰乃刻ばかりに
うくく。乾の方ゟ風吹出。ものすごく大風とぬらりくら
と吹あけて。中天よりびやきくくくまくくくくハ雲ゟ焼と
あ中む。日ハあくゝ光をくくくく

あらう。強風よ。暴風十方に吹きて。湯殿をくつがへし。
くるこの所の海と。海こえ。ちろが是ふいて。大名の屋敷
百家焼失。うまやこがふやけ。そもそも西風あり
こや所々。りのかぜ海。海名こえ。焼あり。数百の男女
あげまとひ。昊出雲へ。けあとに行方なく。昊出雲乃宮
雲井。数千所の場よ。火うとえ。一回よとえ。車場行方
りのかぜ。風ふくあさ。暴風大雷あつまり。雷うへに
おちうとを。乃至。ばうらのうへにて。焼かぬ
場ごけまで。行人あそ。火とのゞまんて。海名
とこしてもとの。けの中にけこと。乃。さこ。さも。今
数ところして。合ハこびあつ。ひとりてこさ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
乃至でも。焼力つきそ。大雷。海へ。乃。ぞ。ぞ。

みけのゞうすうあるとの。ハ。焼。神へ。りえつきて。屋けあと
あさけぶ声。ハうこハとう。ぞ。天へ。ぞ。ぞ。ぞ

ことごとうんとて。牛乃ものに乗入藩の中へ入けるを見よ
いやごとふうさまり下ぬ。あにるがも。中ぬ。友よとこれら
ハ。火ふやりも。家あく乗ものの。百姓千余人也。又法華
乃題門つとあげ。祈。いくみ方人と云牧とをくべ。面
いりあり天魔のるさあや。神乗題門とひとうらられ
で。四ひとしで。紙より八車也。引けるを門ける
押。第。紙ふ門乃きさめ。の大いゆもして。門の実貴
ものとごくひうんとも。家賊親夏といやうう人よ
つこうさひ乃もこ。光よつく人てひくくべさ面は。第ハけう人
うちとりハせさく面。そのあのこに大久の屋乗ホ面
京洗百ケ所。一同ふりえらて。あつもせきあふ法人の
よくこ方とりとかの吹くく面。牧方の男女くひ乗

乃鎧池とる。場の中へ乗入紙よ見とうちとりうべをく
ごさ。紙とり乗人よふこもろ也。家ゆく乗ものの。紙方
三千余人也。どくとる面ふさこと言こにゆくくこ。乗紙
乃橋よ火ゆる也。てくづ也。ハあけをこれ家こ也ども
第後の火よけ。ゆ也。焼乗とこ乗髪。京。町中に
うさ面りくく。夢ゼ乃ごさ。ろ。ごし。ろ。秋の実の郷ふ
ハ。花乃第に火ゆる也。家よあつもり面ろこの。七百余人
焼乗ゆ。郷ゆ牛。新田よ面ゆ也。皆面けかうひく
寅乃くこくうふ火事ハやうく。郷ゆ面ぬ
秋洗よ。ハ。ハ。ハ。ハ月十九日也。ハ角入方に。高ちりこ高
とびひう。ゆ。くに。ハ。ハ。焼乗ゆ。人ハ。ハ。ハ。ハ
見ゆ。ハ。ハ。ハ。ハ

ぐ〜。屋けのうしろハいとひろしてうろこぶ有よ。十九日
己のこくぞうよ。小石川新寺町より出ると出あく。ふうと
小風ふけ〜。車橋行ゆ出ハ。のよ。馬場の中に新宿十町
廿町乃あいよ〜ふ〜。俗名流とそ〜めて。廿八家ケ有。一同
屋けあり。本寺浄土宗。町より。敵寺二三の丸。紙大名乃屋
敷十八ケ所。常盤橋乃内廿七ケ所。むかしの大名廿六ケ所
小名乃屋敷十七ケ所。郭ら南ハ七十二ケ所。数万間前後
十五町。ゆ石一同よ〜ふ〜あるゆ。ハの屋をこゆ。出乃ハ
面のゆ〜。焼ゆ〜ゆ。右ハ百千乃いゆ〜ゆ。一同よ。ゆ前ゆ
ゆ〜。中の郭ゆ。小風ふけよ。ゆ〜ふ〜ゆて
ゆ。ゆの出ハ。郭ゆ。ゆ〜ゆ出へ出ゆ。南ゆ
九余町一面ゆ。町屋よ押あく。京橋中橋の町人九

ゆ〜ゆ。ゆ橋ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ橋の町。前
橋ひ出ゆ。ゆ。男女老ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。車ゆ橋ゆ。草藁。そのゆ。賃賊新見。ゆ。小路に。ゆ
のゆ〜ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ大名ゆ。ゆ。馬と。男女老ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

木挽町。東八枝木町より。大名乃義屋敷。長屋。十六ケ所
一同ふき屋ねうち。後物はふき屋ねうて。西のくぐりに
海鼠あるく焼うり。戌乃くぐりに。鞠ぢち
又所目乃ちう家より。別よ矢央とあく。西風ぢもく吹
ちうり。大名屋敷。数十ケ所をゆきうしひ。そもこうと又ふ風
よあをちうば。ひうぶ山。西の丸ハぷよくそもと弥りうり。南
乃方大名小路サ余ケ所。桜田の町。御よあく。岩の下
大名小路八十六ケ所。婦ちうの所化ひう。三浦町のうち其
数の世乃くぐりに。矢ちて。ほうちうの国ハぷうだうしく
ちうしを。そきうを南へ十一町。芝口三町目。濱多みく
とのづゝ焼うり。おいとうとうと。六十余町。四方十余里
廣野より。郭ら所中六百余所。大名小路五百余所。

五百余家。小名の宿六百余家。浄願寺。二三の丸構
二十余ケ所。江戸中の橋。六十ケ所。ごづくふ橋。京橋。一石橋。ど
うでおうぬ。ど一石橋の
ひろさて。江戸のまちの名所。ど義の数九十余軒焼
神社仏寺。三百五十余所。焼失せり。焼死せし者。十万弐
千百余人也。此節。ハ路。ハ一類
うんぞくもんうらびど小路。横丁。ど
けるど。江戸のどれもかくのごとく。武蔵と下総のさうひ
ひ。牛橋。ちゃうひ。あんれんくびど。ちゃうひ。ひ
ぎ。源とうこ。浅草寺。ちゃうひ。寺とうこ。寺とうこ。諸宗ふひ。寺四百
院とん付。浅草の傍の傍。あつまち。あ江の絶を憚て。そ
うさふ。合仏の。乃傍。ちゃうひ。ど一業百感の者

諸国。ちゃうひ。あつまを。ぶ。同時ふ。ど絶て。同元ふ。埋れ
一ぬのもとめりうこ。ちゃうひ。ちゃうひ。の。同浅。あく。ど。ど。江戸
中の老。ど。男女。あるひ。ふ。ふ。ちゃうひ。或ハ親にくあまき。書
ふ。ちゃうひ。ど。ど。ちゃうひ。ど。ど。ど

海ゆきとりて。弟せうとのとバ。信濃とうさうめ。ぜうことれ。ハ
合とあつて。合をとりこのみ。ぜんぜんの。ハ。ぜんぜんの。ハ
うこけを。極うに。彼の堀の。ハ。ぜんぜんの。ハ。ぜんぜんの。ハ
房全の。座係して。あくぐんとをうつ也

三界の。奇獣。ぜんぜんの。ぜんぜんの。ぜんぜんの

ありけるとぞ。ふと股ゆく月ふかくもやゆくとてぞゆく
月をみるつきをしたる家中乱　とぞいはれける
弦の男いつるやそもハ秋の夜。今ハまちぐまの和尚と。秋つゆ
山ゆくべ。ゆくもこれあり海をこゆるやうつまこれ秋
とつゞゆくさ者ゆくやうに。大名ゆゑ。そらこれ秋
くこゞもに。大に挺の櫓をかくゆく事。只こつぐりそやを射
ゞゞ。こゝゆるまこゝろ。あれ一ゆをとけゞ。秋もさらゆるゆ
もちげこゝこゝゆく。ハ物よゆゞこゝ代の中と。心肝よゆこて
秋をさゝへゞもちゞ。ゆるまゆれゆゞ。ゆゞこれ者よゆもにんゞゝ

第六

灵岩寺

杉蘭へ行程よ。永代為ゆ。ゆゞこゝ
田寺ハ雄峯。松風。灵岩上人の屍基ゆく。海之京の檀林也

ゆゞふ右のうゆまもゆゞ。岩和尚ゆく。ゆゞ。和尚ゆく京都の
和尚流へ。ゆゞ。ゆく。元祖源空上人。第二十世の和尚ゆく
あをゞゆまさゞゞゆゞ。寛永十八年九月朔日ふ。時年八十歳
ゆくゞゆへ。和尚ゆゞ。田寺へハ。以天珂山と代ゞゞ。ゆゞ。ゆゞ
ゞゞとハ。灵人。岩為ゞ。雄峯ゞ乃ゞゞゆゞ。ゞゞ。ゞゞ。ゞゞ
しゞゞよ。為のゞゞゞ。ゞゞゞ

とぶがゆきて。ちそくこく屋せきいぶごろうんとてあるこさ
むしくさ紀の一体やうの義。とうまて。大門さて
おまで。右の方に。石乃金剛乃道場あり

第七　海福寺

其昔寺とて。左の方へ行バ。海福寺也。是ハ弘乃宗創。陽元
禅師乃出家子。福寺師乃宗也。陽元ハ唐人にて。あるい
の作る。倭絵の人也。ゆ堂あり。秋加て。ゆ右ふ文殊。善賢ゆ
十六羅漢と安置せり。海より陽元乃出家とて。もんくもち紀元
ゆ。寺業兵数ゆく。心をさくゆ作る也

いんぐんとぞいとうきれいゆ寺はとあて海福寺也

第八　永代橋乃八幡宮

そ西一ちら。移南へ行て。永代橋乃八幡宮につくちらそもしい

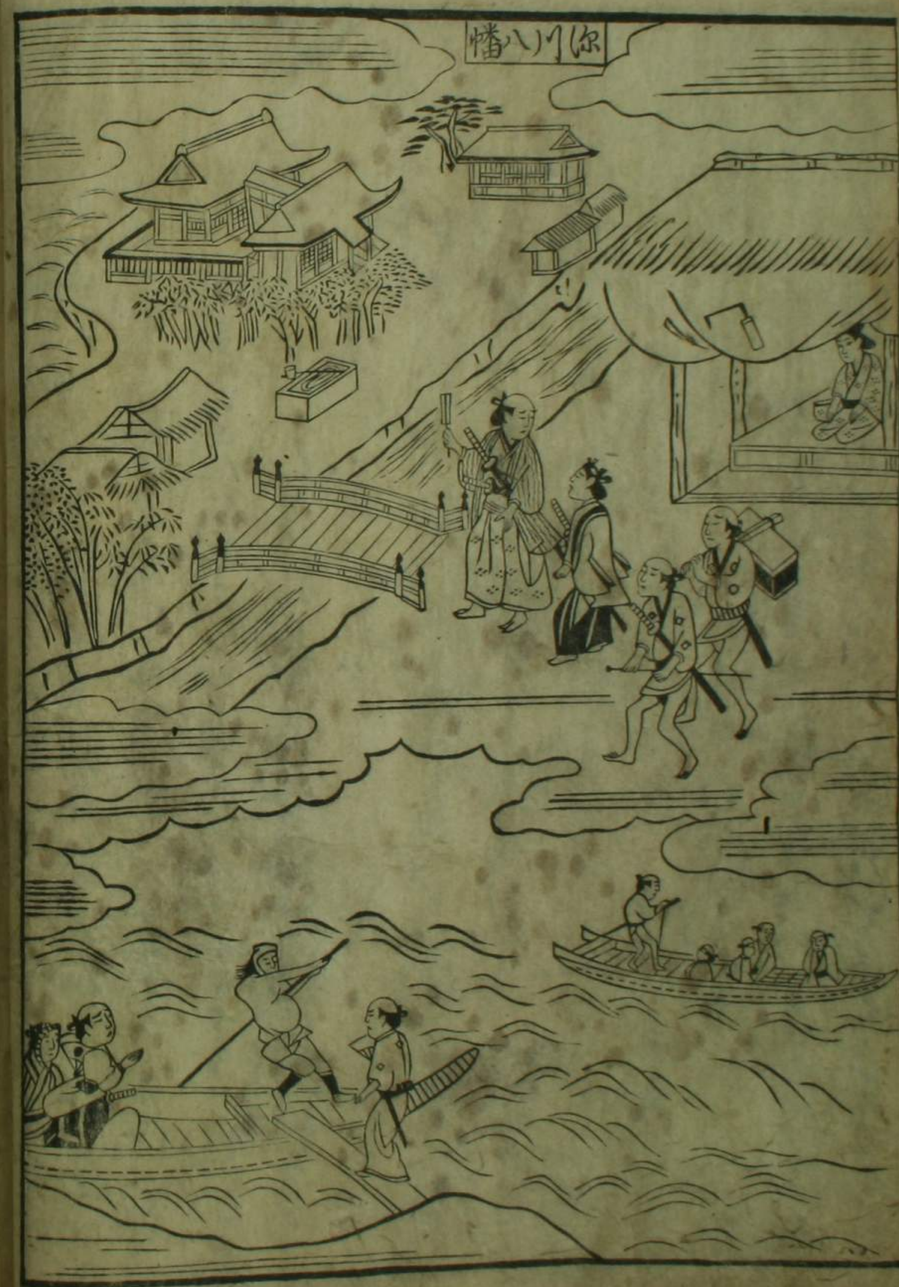
八幡宮。寛永元年の比。長威法印を年法ゆ。七日ゆ移まち
あるよ。そ和の義に。八幡文義中に。伊勢宮ゆ。我永代
橋に移元まて。と。数度日義とうくゆ。そ和ゆ。みづく
信をあらし。一社の文所とて。ゆ。ゆ。ゆ

九年こづのとのの下。八月十六日より神く祭礼をおこなひて
あるじの式とんぞをもてなさしむ。神輿をくわ〜ふ。仏人渇
仰のうるべをうるふく。海の面めぐりひく人家ありをめぐり
給へ安日年のひとる。法勝寺の前乃かりやにうつて。高野と
あるれ。大師山。永代寺と号せり。同六年の夏弘法大師
出羽恵ゆるしあり。其神若ふ

みちのおく。弘めん法のおしさが家を。人乃心のうるわしびとも
是よりて。高野山。面門を。碩学手ゆ。東西一流の細信。此
永代寺より集会をしめ。一夏九旬の間法筵をひらく。祖大
師乃四新堂をたて。高言三密乃秘紙を濃とそれ。
しるし。神前より鈴鐸をらるるりてゆ。むく人ものうるべ
回をこ年乃秋。天下大平の為に。神前めぐ流鏑馬を始

び。是を為ぐ異乃法式をうつして。なを若ふ般屋拾遺をうまく是を
見る。はじめて半年を賜とす。京都三年の夏神宮乃
宮。日光山社系の序に下向の道より海よりまうでゆひ。天
下安全の為。毎日乃号。神前より山会頭を勤ふ。山をうる
毎流泉乃沖源を

永代の堂久しきさ山海をめぐ。神ぐきのうち
をあ〜ぐ〜ぐ〜ぐ〜の松もそそりて。をる岩ハ水を代の寺
物ふ山海乃地系。又あるひ
をん屋。南ハ那川。北ハ目前ゆく。神の方ハ富士の嶽
をたてそびく。戌亥の方ハ海波ふかのうに見へく
鳥をとゝまりて。せ寅の方ハ海ようちつゞきて。八海色
乃孫ちうく。塩屋の郷をとりふるびくゝをひまぐ



孫四郎をとりとめ、ゆうてをうつ人、利生をうけんとうつみんとをもはんとしてをうつ人あらむ事
百ふの数あるべしとぞ中に
さらに豆腐のひけば洲崎と永代乃橋
実もとゆる流れてゆくみなもとの流れ永代の橋
永き代乃浦吹風小雨くもりて八十路てしも月よ新れ
寛永二年和光同塵の結縁の砂ゆ御道八利物の流れ
ときは現来二世乃四ちうひ祝うくのまさるべきや
永き代を祈もの寺をば大堂と大きもとゆ
石清水寺流乃と人永く代くハ大ふ堂かざしに 諸男
第九
そもそもそ大流乃あるゆ寺

を[illegible]ふ[illegible]く。異[illegible]へ行く。[illegible]橋へ[illegible]く。[illegible]橋を[illegible]
みなと町へ[illegible]。[illegible]の[illegible]
[illegible]　東照宮[illegible]
[illegible]音と[illegible]。[illegible]流と[illegible]
[illegible]人[illegible]。[illegible]人と[illegible]
[illegible]公の[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]二流より[illegible]
[illegible]事。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]

[illegible]

[illegible]

第十

赤坂氷川大明神 并 小六

[illegible]

氷河大明神の社ふるく。[illegible]人王六十二代。村上天皇の[illegible]。天長年中に[illegible]国甲斐の郡に。蓮林信[illegible]と[illegible]。一念三昧の[illegible]。[illegible]

歌の美にいづくともなくしづ[illegible]。[illegible]一人[illegible]て云く。我はあま[illegible]中に住まして。一千余[illegible]をとどめ[illegible]の地いそぎ[illegible]。[illegible]の[illegible]。[illegible]人[illegible]の[illegible]。[illegible]。[illegible]。

くらして。永川明神と名付奉る。神事八六月十五日
あり。人ゆあり。物ふ神法をくるゆく。信人の多をと
うの人ゆうらゆく。山の神を色めく。而くしてうん
ちゆしをくしてふ人世ふふ乃えくふもとろハ愛文ちのしろ
実東のゆとして。夜男ある馬追ゆとろうが。山姥ゆ伝
ろう。小ちの宝双のとてひゆく。くくとの前後の事を言
て。こくくとくくとうや。扨うもとゞ面白しくろ。馬のむちいえ
朝ゆとゞ。勝のゆめ八九むうけて。分をとゆさずゆとくゆ
くろうや。生ゆハ面四方の前ときくくろ。山姥ようもとゞ
ゆを作ろうゆふ。ゆふ生ゆ。面のとのくくろハ実東
乃ゆくくもくくゆとて。中勝くもふくふ
年三十多行つ。中郷くくゆとさくうて。日本ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第十一

永田馬場の山王大権現

[illegible]

山王大権現の山社也。山門社乃神と[illegible]

二代慈覚大師の[illegible]

和光同塵乃利益[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

屯二八中七社の間。氣比の宮。如淵八重紙毛也。屯二八下七社の間。まそかの天。如地八文殊大士也。いづもと國家を鎮のことわざ。理世安民乃鳴八。とくい東宮八列のちまことにこちきくハ六条七道の果ようこもろ。後ちにつ境。延徳年中に作乃ひしのそ。乃信仏縁乃為。三社の山社と。この中れ淵の亀にうつくしあひて。乗興に依遊ふこと。奇驚ある事。ちくし若亀せち。又明暦三年の週禄。後。今の淵地乃蘇山。双の勝地。ちうにて。上命をうけてはつりて。ひあるようにしてまけ。周日いくぐくあ〜じて。造受の功とそ〜為。今度玉積天ふ〜ゆき。屋根朱篭地より映ぢち。祐ゆ六月十五日地。沼中の大神事として。紙大ゆれ大ちと。高志祐ゆ〜ゆ〜ゆ也ぞ。おろゆ〜ゆ〜ゆ〜ぞ。いづもとそてこゆ〜ゆふ

ゆふ大造乃神。祭ゆもてぞとそて。淵年ひれゆこゆ。ちくとそ地

ゆふ周ハ。ゆもを祭ゆ。高志ゆれに。ゆ愛てもさゆ〜ゆひを切美ひせよ

ひ山神乃初者。猿ゆ。ちくて。猿の男

ゆ〜ゆ〜ゆ〜ぞ。ゆ〜ゆ〜ゆ〜ぞ。ゆ〜ゆ〜ゆ〜ぞ。

乃名ごとさんゆ。家に安置の石を寄せ屋敷地をくしてて
築立てくるに。山乃ごくに入れ。いろ面白もあるあ地あ
ぶ〜とあるとひ。〜〜の人ふ〜ぶ〜ひるまでいろ面白
ひ〜〜れおの地ハ古社めくいたん。むし〜今井社名
義年。家乃今井ゆきと ここの。名所の社めていし〜
古老の口〜〜ていとこの。ねいろ。ねいろ乃ろくいろと
ていて。山乃築をめぐりろふ。社傍の物舎牧ナケ所
泉地のくに作りあ〜べらまて。いづまを庭の系とのづ
〜〜れ泉ろとぬ。名この名の記。あくのこと丹をうへとき
乃ぬて。ロ手ろくよてぐ〜〜ろ。れけ家涼
し〜さ。〜〜ていあ〜ぶ〜ろ。ねる。社宜かんあざの家居ろ
も数十ケあ〜べる。社へ名ろ右へ神ろ貝名大脇ハ

別當勧理院也。社領千石。常寿附也。拝殿へ入て向ふ
右の方ハ。奥州二本松乃寺。ハ書院ろ。西南
とりんまで。山王乃社。泉池の水ふ移ろ。茅葺民家とろ人
て。又ろ〜〜家席あ〜〜ぶ。ぶろ寛文十二辛子年十月下旬
ひ〜〜弘文院春秋とまり。ろ行ろ。硯と乙筆深て

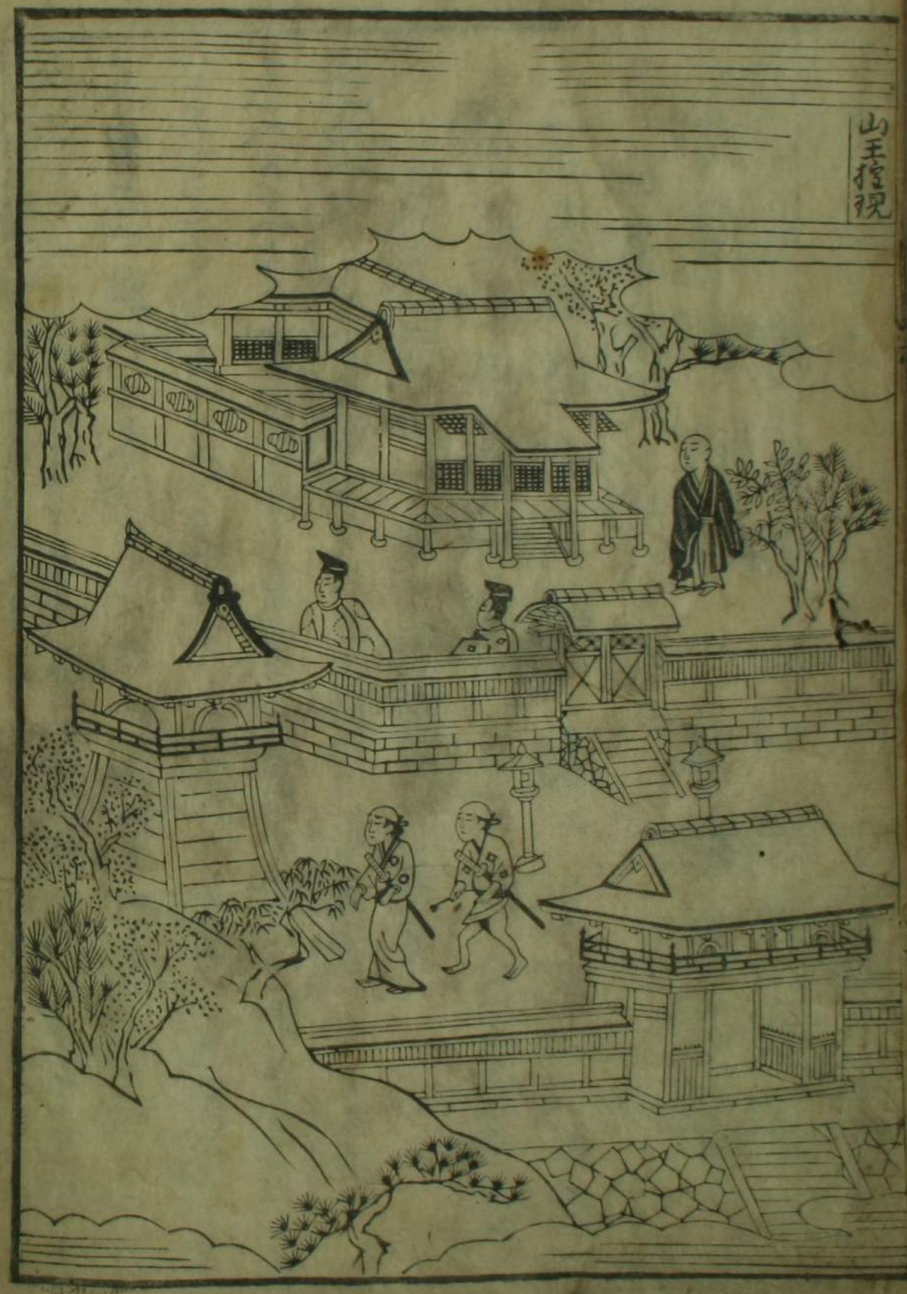
夏日應丹羽拾遺之招賦庭前即景

賓筵礼畢到斜陽　日吉新宮隔水望
二本松堅千里緑　森々復木一庭牆

同席賦晩景

南薫風袂揚　緑樹幾千章
遥莫外遏熱　一樓五月涼

弘文学士



かくのごとく絶家をうんじ。他をとりつぐこと

第十二

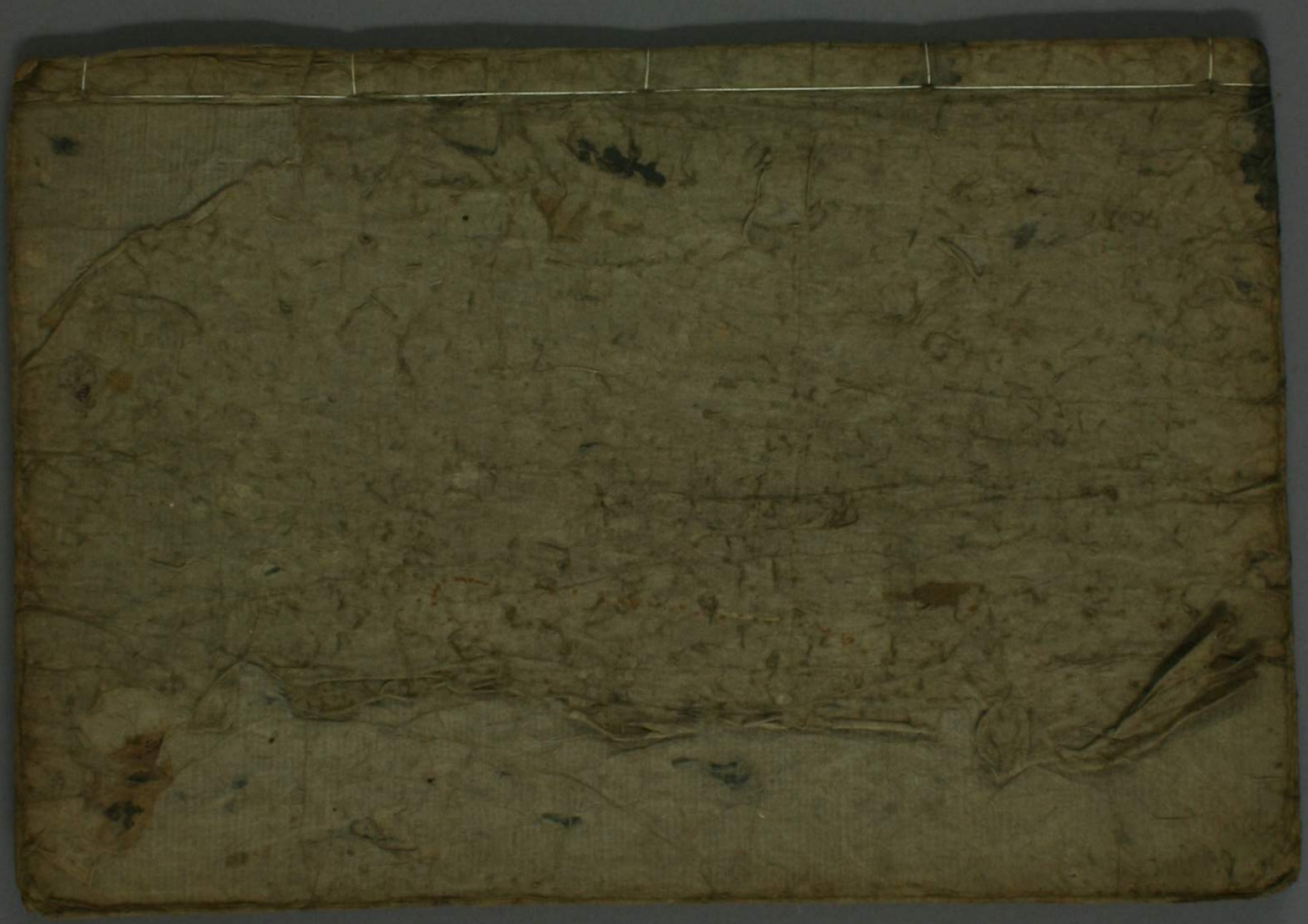
能所

そもそもこの物語は。[illegible]。能が哭ふるこ
さまをば續み戒梁基の郷と云ふ。前大納言為世
おのづから。[illegible]
基の子。[illegible]
相實卿。[illegible]
當實盛。[illegible]
[illegible]
一天の海。[illegible]
跋
かくて宿命の物語。[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蘭学問答

所蔵